

教科指導における受験指導の位置づけ

- 知識の階層化でみた大学入試センター試験(2010) -

発表者 長崎県立長崎東高等学校 蒼下 和敬 / 共同研究者 長崎県立猶興館高等学校 宅島 大亮

0. はじめに

この内容は、別稿(蒼下、2010)の成果を九州高等学校地理教育研究会の2010年度研究大会(宮崎市)における研究発表用に改めたものである。

1. 課題意識

現行教育課程の地理歴史科における地理(A/B 科目)は、選択科目として生徒が履修する。生徒は、世界史・日本史・地理のなかから地理を選択する理由として「歴史に比べて記憶する量が少ない」ことや「大学入試センター試験(以下「センター試験」とする)で点数を取りやすい」ことをあげ、実際に多くの学級担任もそのように助言していることが多い。

ところが、実際に地理の授業が始まると、はじめに学習に取り組む生徒たちの中からも、「覚えただけでは成績に繋がらない」「きちんと勉強しているのに成績が上がらない」など、苦手意識を抱く者が少なからず出てくる。

なぜ、地理は一生懸命学習したからといって、その努力量が必ずしも成績に反映されて来ないのであろうか。

そこで、本稿では、特に影響力の大きいセンター試験(地理 B)を取り上げ、センター試験がどのような質の学力を受験生に問うているのかを明らかにすることで、教科指導の現場ではどのような点に注意して授業を工夫・改善することが必要なのかを考察してゆく。

2. 知識の階層性でみた問題分析

センター試験の問題を解答する際には、受験者は自分のもっている何らかの知識を利用して答えを選択することになる。ただし、問題によって問われる知識には質的な違いがある。森分(1978)らは、知識の質的な違いを「科学的知識の構造」として明らかにしている。筆者ら(2009)は、森分らを参考にして、より実用的な「知識の階層性モデル」を提案した(図 1)。本稿ではこのモデルに従って考えてゆく。

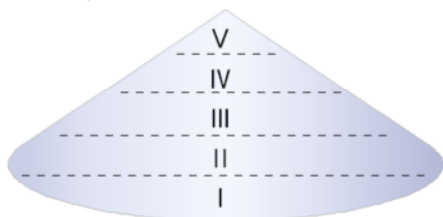


図1 知識の階層モデル

- 、 事象・系統を超えた説明
- 、 事象についての「推論」による説明
- 、 事象についての「推論」による説明
- 、 事象についての「分類」・「解釈」による説明
- 、 事象についての「情報」

知識階層「Ⅰ」を問う問題は、「日本の首都は東京である」などのような情動的知識をさす。センター試験では、選択式ということもあり、単にこの種の知識を問う問題はほとんど見られない。

知識階層「Ⅱ」を問う問題は、社会的事象の分類や経緯・構造を既存の知識によって説明できるかを問うており、センター試験では、次のような問題が該当する(2010年本試験、第4問 問2(20) p.156)。

問 都市と河川の関係について述べた文として適当でないものを、次の ~ のうちから一つ選べ。

ヴァラナシ(ベナレス)は、ガンジス川に面した宗教都市であり、巡礼に訪れた人が川で沐浴している光景がみられる。

ニューオーリンズは、ミシシッピ川河口部に位置する港湾都市であり、メキシコ湾岸で採掘される石炭の積出港として重要である。

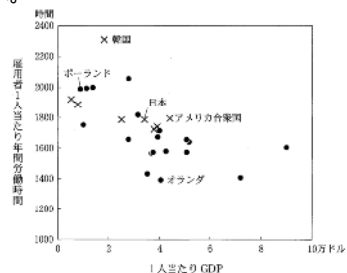
バンコクは、チャオプラヤ川の三角州(デルタ)に位置する首都であり、果物やみやげ物売る水上マーケットは観光地にもなっている。

マナオス(マナウス)は、アマゾン川中流に位置する河港都市であり、自由貿易地域に指定されたことにより、外国企業の立地が進んでいる。

この階層を問う問題は、その対象がどのような特色を持っているかを分類して説明できる個別的知識がなければ正答を得ることは難しい。

知識階層「Ⅲ」を問う問題は、社会的事象の背景や根拠に対して既存の知識の範囲内で解釈的に推論させるものであり、センター試験では次のような問題が該当する(2010年本試験第4問 問6(24) p.160)。

問 労働時間は、経済水準や生活文化、社会制度の違いを反映して国ごとに異なる。次の図は OECD 加盟国の 1 人あたり GDP(国内総生産)と雇用者 1 人あたり年間労働時間を国ごとに示したものである。図から読み取れることがらとその背景を説明した文として適当ではないものを、次の ~ のうちから一つ選べ。



オランダは、ワークシェアリングの取組みが広く行われていることなどにより、ヨーロッパの中でも労働時間が短い国の一つとなっている。

韓国は、1980年代の経済発展にともなって労働時間が増加したことにより、OECD加盟国の中で労働時間が最も長い国となった。

日本では、週休2日制の導入など労働時間の短縮をめざした取組みがなされたことにより、アメリカ合衆国と同程度にまで労働時間が減少した。

ポーランドは、西ヨーロッパ諸国と比べて労働生産性が低いことなどにより、ヨーロッパの中でも労働時間が長い国の一つとなっている。

この知識階層を問う問題は、図や表などの資料を読み取らせるものも多く、そこから得られた情報と既有知識を関連づけて答える必要がある。

知識階層「 」を問う問題は、社会的事象の背景や根拠に対して理論など体系的に整理された科学的な知識を用いて論理的に推論させるものであり、センター試験では次のような問題が該当する。

(2010 本試験 第5問 問4(28) p.165)

問 次の表中のP-Rは、オランダ、ドイツ、フランスのいずれかの貿易依存度*と輸出・輸入の貿易額上位5か国を示したものである。表中のP-Rと国名との正しい組み合わせを、下の～から一つ選べ。

*GDPに対する輸出額及び輸入額の割合。

	P		Q		R	
	輸出	輸入	輸出	輸入	輸出	輸入
貿易依存度(%)	68.3	54.0	38.9	31.7	31.7	33.8
順位	1位	2位	3位	4位	5位	6位
	オランダ	ドイツ	フランス	オランダ	ドイツ	フランス

	P	Q	R
①	オランダ	ドイツ	フランス
②	オランダ	フランス	ドイツ
③	ドイツ	オランダ	フランス
④	ドイツ	フランス	オランダ
⑤	フランス	オランダ	ドイツ
⑥	フランス	ドイツ	オランダ

この知識階層を問う問題は、仮に出題に関係した個別性の高い情報知識を持っていたとしても、それらを包括する理論的な考え方にもとづいて推論しなければ正答することは難しい。この問題の場合は、「貿易依存度」から国内市場規模を推測し、「順位」にある特に経済交流が活発な近隣国を相対的に比較することで解答を導くことになる。

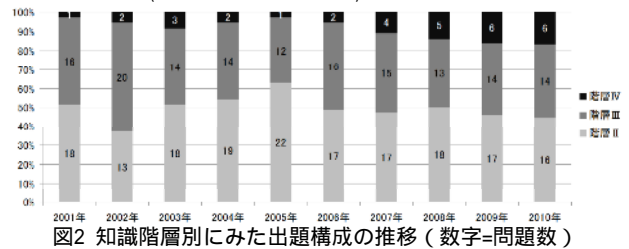
なお、知識階層「 」を問う問題は、形而上学的な類のものであり、科学的な検討がきわめて難しく、センター試験での出題は見られない。

3. 知識階層別に見た出題構成の推移

続いて、2001年以降のセンター試験地理B問題を1問ずつ知識階層別に分類して、各年の出題構成を調べてみると、次の図2のようになった。

これを見ると、出題35~37問中、例年約半分が階層「 」に分類される個別性の高い知識を問う出題となっている。すなわち、問題の半分は個別的知識や概念の有無や正誤それ自体を問う内容

になっていることがわかる。一方で、残りの半分は、個別的知識や概念の有無を直接問うのではなく、推論によって解答を導き出させる出題がなされている。このうち、既存の知識の範囲内で解釈的に推論させる問題(知識階層「 」を問う問題)は、従来は知識階層「 」と同程度の割合で出題されていたが、近年、特に高等学校学習指導要領の改訂にもとづいた新課程体制での試験となる2006年以降、その割合は漸減し、代わりに理論など体系的に整理された科学的な知識を用いて論理的に推論させる問題(知識階層「 」に相当)が漸増している。



さらに、知識階層別の平均正答率を過去4年分にわたり調べると、階層の高次な知識ほどいずれの年も正答率が低いことがわかる(図3)。

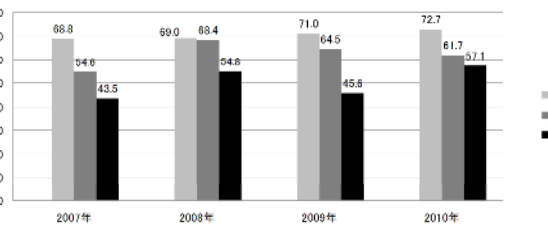


図3 知識階層別に見た問題の平均正答率 (数字=%)

4. まとめ

本稿からは、階層が低次の知識を問う問題の正答率は比較的高いものの、高次の知識を問う問題の正答率は低くなり、総合点に大きく影響を与えていることが伺える。また、階層が高次の知識を問う問題は年々出題の割合が増加している。私たち授業者は、ただ地理的事象や概念を教え込むのではなく、生徒にいわゆる「地理的なみ方考え方」を形成させていくことが以前にも増して強く求められてきている。

5. 参考資料・文献

- ・ Benesse 進研模試編集部(2007～2010)『大学入試センター試験徹底分析』
- ・ 蒼下和敬・福田正弘(2009)『社会認識の質的な成長をめざす授業の研究(2)』長崎大学教育学部附属教育実践総合センター紀要
- ・ 蒼下和敬・宅島大亮(2009)『知識の階層化してみた大学入試センター試験』二宮書店『地理月報』
- ・ 蒼下和敬・宅島大亮(2010)『地理的なみ方考え方の育成をめざす授業の試み』長崎県高等学校教育研究会地歴公民科部会『研究集録』(平成22年度)
- ・ 森分孝治(1978)『社会科授業構成の理論と方法』明治図書